

つながる・広がる外国語活動

～他教科・領域とのカリキュラム・マネジメントをとおして～

中村 正雄

2020年度より新学習指導要領が実施され、小学校3年生から外国語活動、小学校5・6年生からは外国語科と教科化され必修となる。グローバル社会において我が国だけでなく外国との文化の違いや言語について学び、外国の人との交流を行っていくことが大切になってくる。小学校中学年での外国語活動は、まさに子どもたちに外国語という言葉をとおして慣れ親しみながら国際感覚を身に付ける学習であると考ええる。しかし、少ない授業時数で外国語を習得する目的で授業を行えば、苦手意識をもつ子どもや学習内容が身につかない子どもも出てくる。だからこそ、教科・領域との関連性を上手く生かして、子どもたちにとって魅力的な学習計画を立てて進めることが大切である。本稿では、総合的な学習の時間や国語科とのカリキュラム・マネジメントをとおして、子どもたちの学びについて論述する。

キーワード：外国語活動、カリキュラム・マネジメント、総合的な学習の時間、国語科

1. 研究の目的

今年度、本校の研究テーマは『未来に生きて働く資質・能力の育成 ～探究力を育むカリキュラム・デザイン～』である。3年生という学年では、語彙力がそもそも少なく、母語ではない言語を使って主体的に活動するのは難しいと感じた。授業時間数も限られている中で外国語を話すということ自体、子どもにとって難易度が高いものであると感じたからである。しかし、3年生にとって魅力的な学習計画を立てることで、語彙力を補完しつつも意欲的に学習に取り組むことができるのではないかと考えた。それには、外国語活動の時間だけでなく、子どもたちがより多くの言葉に触れられるよう他教科・領域との関連が非常に重要であると感じた。特に総合的な学習の時間(以下CHANGE)と外国語活動の2本の柱で単元を構成することで、学習したことを双方向に活用・発揮しながら進められると考えた。

2. 研究仮説

子どもたちが知りたい、話したいと思うような学習課題を設定し、他教科・領域と関連させながら学習することで汎用的に学びに向かう力を育むことができるであろう。

詳しくは後述するが、外国語の人とかかわることができる交流会を設定し、交流会の内容や交流会に必要な外国語を子どもたちにデザインさせることで意欲的に取り組む姿が見られるであろうと考え、実践した。

3. 研究内容・方法

外国語活動とCHANGEの授業を組み合わせることで単元を構成することにした。CHANGEの学習では、学習のゴールや課題を出し見通しをもたせる。そして、必要な知識を外国語活動で習得し、活用するという流れを作った。こうすることでゴールに向かって、子どもたちがどんな外国語を身に付けたらよいのか自ら考えられると思ったからである。

その中で外国語活動での学習においては、単元における目標等を以下のように設定した。

○目標

- ・インタビューを行うことをとおして、相手意識をもちながら外国語でやりとりする。
- ・相手に伝わるよう学んだ表現を生かして尋ねたり答えたりする。

○外国語活動における探究力・省察性としかけ

探究力	外国語を使って尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しみ、進んで外国語を使って友達や外国の人とやりとりをしようとする態度(主体的に取り組む態度)
-----	--



授業におけるしかけ

- ・単元のゴールを見据えて目的意識をもたせる。
- ・子どもたちが外国語に触れ「楽しい」と感じることができる場を設定する。
- ・友達とのやり取りを行うことができるアクティビティを取り入れ、「もっと外国語を使いたい」「外国語を使ってやり取りできた」という心情を育む。

省察性	外国語をもっと知りたい, 使いたいと思ったり, 外国語で何というのかという問いをもととしたりする力(主体的に取り組む態度を支える省察性)
-----	--



授業におけるしかけ

- ・外国語を進んで使えたことやもっと知りたいことなど, 自己を振り返る中で外国語の良さや面白さ, 楽しさに気付かせる。

4. 授業の実践

4. 1. 学習課題の設定

きっかけは外国語活動の学習でたくみが書いた振り返りであった。「今まで習った外国語を使って外国の人と話したい」と他者意識をもって取り組もうとしているたくみにとって, 外国語を使って話すということ, 外国の人とコミュニケーションを取りたいということが大きなモチベーションであると感じた。よって, この振り返りを学びのきっかけにとらえ外国の人と交流する『3A 交流会』を開くことにした。

4. 2. CHANGE を活用した活動

前回の振り返りから外国の人と交流する「3A 交流会」を2回行うことをCHANGE の中で告げた。子どもたちはワクワクしながらもどんな交流会にしたいのか話し合っ、その計画を立てた。話し合いの中で子どもたちは, 来てくれた外国の人たちにプレゼントをしたいと考え, メダルを作ることにした。

しかし, ただメダルを作って渡すだけでなく課題意識をしっかりとってほしいと考え, 「外国の人が貰って嬉しいメダルにするにはどうしたらよいか」と問いを投げかけて考えさせた。以下は話し合いの様子である。

教師 : みんなプレゼントを渡したいという気持ちは分かったけど, 外国の人が貰って嬉しいと思ってくれるメダルにするにはどうしたらよいか。

さおり : 実際に好きなものをインタビューして聞いてみたらどうかな。

みほ : 今までに習った「Do you like?」も使えるよ。

けん : それだったら「What do you like?」も使えるよだね。

事前に学習していた「Do you like?」や「What do you like?」を使うことで相手の好きなものを聞き, メダルづくりに生かせると子どもたちは考えた。相手からもらって嬉しいメダルを渡すというゴールを明確化することによって, 学習したことを関連させながら話し合う姿を見ることができた。

4. 3. カリキュラムデザイン

CHANGE の学習において話し合うことで子どもたちはもっと外国語を知りたいという気持ちになった。外国語活動だけでなく, CHANGE の学習や国語科のインタビューの仕方と街区集が相互に結びつき, 深められるよう計画を立てた(図1)。

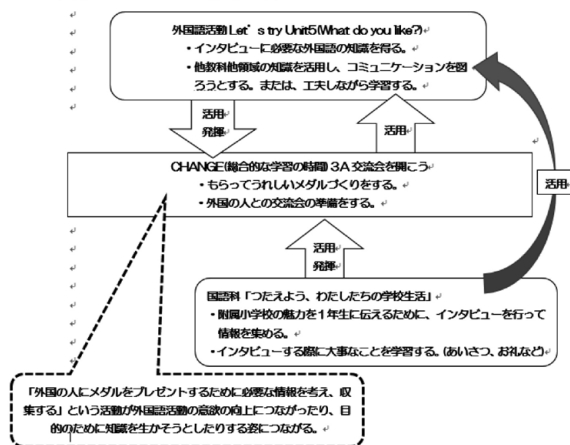


図1 カリキュラムデザインのイメージ図

- ①CHANGE 「3A 交流会の計画を立てよう」
- ②外国語活動「What ○○ do you like?の表現を知ろう」
- ③CHANGE 「メダルのイメージを考え, 知りたい表現をまとめよう」
- ④外国語活動「知りたい表現をFLT の先生に質問しよう」
- ⑤CHANGE 「インタビューシートを作ろう」
- ⑥外国語活動「インタビューの練習をしよう」

4. 4. CHANGE と外国語活動

本単元では, CHANGE と外国語活動を入れ子にして単元を構成した。子どもたちは相手の好きなものを聞き出すために既習の「What do you like?」を使おうとしていたので, より便利な表現「What ○○ do you like?」に慣れ親しませた。(②の学習)間にスポーツや色などを入れることで好きなもの・ことを聞き出すことができると子どもたちは知ることができた。

次の③の授業では, メダルのイメージ図を描かせ, 「What ○○ do you like?」の○○部分に入れる言葉(何を外国の人に聞きたいか)について話し合った。メダルという物から色や形を工夫したい, 相手に聞きたいという意見は出ると考えた。しかし, それ以外の事柄には気付きにくいと考えた。「こんなメダルもあるんだ」「こんなことを聞いてみたい」といった思考につなげるため, イメージ図をもとに紹介する活動をした(図2)。

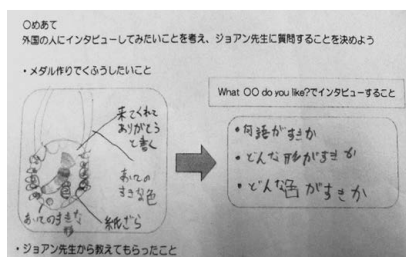


図2 メダルのイメージ図と聞いてみたいこと

教師：どんなことを外国の人に尋ねてみたいのかな。
はると：好きな季節をきいてみたいな。
このみ：そうやね。今秋だからね。
りょう：そうそう、秋が好きってわかれば焼き芋とかメダルに入れたら喜んでくれるかも。

話し合いの中で、教師が想定していたものよりも多く、子どもたちが外国の人に尋ねてみたい事柄が出た。例えば『教科・果物・スポーツ・模様・マーク・動物・食べ物・季節・言語』などがある。イメージ図を共有することで知りたい外国語の言葉をまとめることができた(図3)。

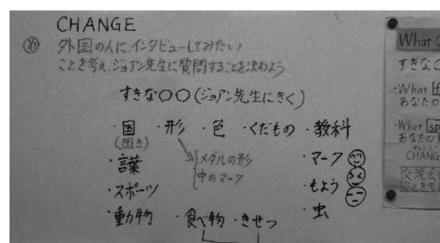


図3 子どもたちが外国語を使って聞いてみたい言葉

4. 5. 子どもたちの探究的な学び

CHANGE の学習と外国語活動を組み合わせることによって新たに知りたい言葉が生まれ、FLT の先生に聞くことができた。そして、インタビューの練習を友達同士で行った。(⑥の学習)

インタビューの練習では、3人グループを作り、1人が評価者となってインタビューの工夫やアドバイスについて話し合った。評価者を入れたのはペアでのインタビューの様子を客観的に見て、良かったところやアドバイスを考えさせるためである。子どもたちからは「Hello って挨拶がいるよ」「インタビューが終わったらお礼を言わないとね」といった意見が出た。さらに1回では聞き取れなかったときに「One more, please」と外国語を使った子どもや「See you と Thank you ってどっちを先に行った方がいいかな」と考えていた。話し合い活動の中で子どもたちは、外国の人とのインタビューを想定し何が必要なのか考える場面があった(図4)。



図4インタビュー練習の様子

5. 授業の考察

本単元は、「外国の人が貰って嬉しいメダル作りをする」という学習課題を設定し、CHANGE の学習と外国語活動を相互に関連させながら学習を進めた。目標として①外国語を使って尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しみ、進んで外国語を使って友達や外国の人とやりとりしようとする態度(主体的に取り組む態度)②外国語をもっと知りたい、使いたいと思ったり、外国語で何というのかという問いをもとうしたりする力(主体的に取り組む態度を支える省察性)は概ね達成できたと考える。

特に CHANGE と関連させることにより外国語の言葉をもっと知りたいと思う意欲につながることができた。例を挙げると、外国の人に尋ねる言葉の中に言語(What language do you like?)を選んだ子どもがいた。理由を聞いてみると、ゲストの好きな言語を知ることによってその言葉を使って「ありがとう」の言葉をメダルに入れたということが分かった。

また、「メダルに模様を入れたいけど、外国語で何と言うのか分からない」「FLT の先生に聞いてみたい」など知りたい言葉を CHANGE で考え、外国語活動で知ることによって学習の幅が広がった。また、外国語をみんなで共有することでクラス全員の語彙も増えていった。

本単元では、教科書にも載っていない単語として(season, insect, language, design, pattern, mark, subject, country)といった語句を共有し、フラッシュカードを用いて練習することができた。

さらにインタビューを想定してペアのやり取りを第3者の視点から評価し合うことで、よりよいインタビューの仕方について話し合ったことも外国語での新たな表現に触れる機会となった。それは、国語科の学習で「インタビューの仕方」を事前に学習したことが生かされたと考える。国語科では、「自分の学校の魅力を1年生に伝えよう」というテーマで学習を進めていた。魅力を伝えるには、学校にどんな魅力があるのか知らなければならぬ。そこでインタビューという方法で教師や6年生、卒業生などにインタビューを行った。子どもたちはどのようにインタビューを行えばよいのか話し合った。するとあいさつ・目的・許可・質問・お礼といったことが必要だと考えた(図5)。

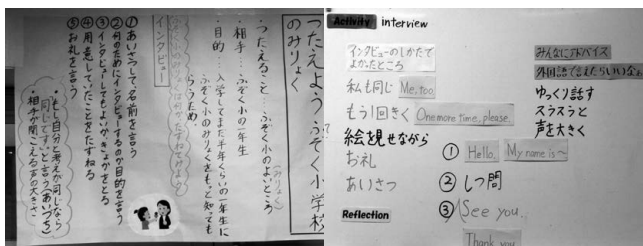


図5 国語科の学習(掲示)左と外国語でのインタビューにおける子どもの思考(板書)右

外国語活動のインタビュー活動の時にはいきなり質問するのではなく、あいさつをしたり、自分の名前を言ったりする子どもの姿が見られた。そして、子どもたちは外国語でインタビューする時の手順を話し合い、次のように考えた。①Hello②My name is～③What do you like?④Thank you.⑤See you

さらに自分も同じ考えだった時に「Me, too」や聞き取れなかったらもう一度言ってほしい「One more time, please」など国語科で学んだ手順やうなずきなど、相手意識をもって考えた発言が見られた。後で聞いた話ではあるが、プレゼントすることは秘密にしておきたかったので「なんのためにインタビューするのか」という目的に関する言葉は言いたくないと分かった。

次の外国語活動の時間では、ゲストを迎えて一緒に活動し、途中でインタビュー活動を行った。練習したことを上手く使ってインタビューしていたが、中には「What do you like?」の〇〇の部分をつまみ替えて、想定していたことよりもさらに聞く場面もあった(図6)。



図6 交流会でのインタビューの様子

6. 成果と課題

本単元をととして、子どもたちが相手が喜ぶメダルをプレゼントするといった他者意識をもって取り組み、新しい表現にも挑戦しようとする姿勢が見られたことは非常に良かった。これは、外国語活動の時間だけでは実現しなかったように思う。3A 交流会を自らの手でデザインし、自分にとってどんな外国語の表現が必要なのか考え、既習事項と組み合わせることにより主体的に取り組む態度につながったのではないかと考える。もう一つは、ゴールを先に明確化することで子どもたちの学びを促すことができた。また、知りたい外国語を学びの足跡として掲示したり、フラッシュカードとし

て練習したりすることでクラス全員が新しい語句を学ぶ機会につながったことは非常に良かった。



図7 メダルをプレゼントする様子

そして、何よりも子どもたちが外国語を調べ、練習し、オリジナルメダルをプレゼントしたことについてゲストが大いに喜んでくれた。だからこそ子どもたちには満足感があつたように感じる(図7)。

「また、交流会をしたい」「もっと色々な人と外国語で話したい」と振り返りにも外国語に対する意欲の高さを感じることができた。

課題としては、発達の段階に応じて教師がどこまで支援するのが難しい所である。3年生という学年を考えると難しい単語が出た時に支援する必要がある。何よりインプットを繰り返し行わなければ、外国語活動が難しい、苦手だと感じてしまうことがある。また、図6にあるインタビュー時における許可に部分に着目させることができなかった。インタビューしても良いですか「May I ask a question?」などと言入れることで相手のことを考えながらインタビューすることができることにつながった。しかし、インタビュー時における評価者の視点をインタビューのしかたでよかったところ、みんなにアドバイスとしたので、教師とのねらいのズレが起こってしまった。子どもたちから声の大きさや速さなどのアドバイスが出たが、外国語の表現について考えて欲しかった。子どもたちに向けての発問などもっと視点を絞って考えさせることが3年生には必要であると感じた。

本実践を経て外国語活動における探究的な学びは、他教科等と関連させながら行うことにより、「もっと知りたい」「話したい」と外国語を積極的に学ぼうとする意欲につながると感じた。そのために教師が発達段階に応じた学習計画を立てる必要がある。そして、子どもの考えもみとりながら外国語活動の学習に生かしていくことがこれからの主体的な学びを支える外国語活動・外国語科の学習につながるのではないと思う。

参考文献

樋口忠彦・高橋一幸・加賀田哲也・泉 恵美子(2017)「Q & A 小学英語指導法事典」教育出版社
文部科学省(2018)「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編」文部科学省
兼重昇・佐々木淳一(2018)「Let's try! 指導案・評価完全ガイド」学陽書房